

## 【日本の大学】第2回——京都大学：自由と自主の学風

京都大学の沿革は、1869（明治2）に大阪に開校された理学校、舎密局（せいみきょく）に遡る。翌年には洋学校と合併して開成所となるなどの変遷を経て1889（明治22）年に大阪にあった第三高等中学校（のちに第三高等学校）が京都に移転した。1886（明治19）年には、帝国大学令が制定されて東京帝国大学が誕生。近畿地域においても帝国大学の設置を求める声が高まったが、財政難から見送られていた。1897（明治30）年になり、第三高等学校を移転させ、その土地・建物を利用する形で、日本で2番目の近代的な大学として京都帝国大学が創設された。



京都は、明治時代に東京に遷都されるまで千年もの間、日本の都であり文化や宗教の中心でもあったため、京都大学の存在や教育内容には歴史や伝統が色濃く映されている。

京大は、入学試験で最難関であり国立大学のトップランナーである東京大学に対して、「東の東大、西の京大」として対比される存在である。東大が法学部出身者を中心に官僚や行政官を目指す傾向が強い（近年はその傾向は弱まっている）のに対して京都大学は伝統的

に在野志向、反骨精神が強いとみられている。

設立当初から「自由の学風」の精神を採用、その精神は、第2次大戦後の1947（昭和22）年に京都大学となり、また、2004年に国立大学法人に衣替えした際に定められた基本理念にも受け継がれている。基本理念には「創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎とする」と書かれている。

戦前、学問の自由をめぐる事件として著名なのが「滝川事件（京大事件）」である。1933（昭和8）年、法学部の滝川幸辰教授の自由主義思想を理由として時の鳩山一郎文相が免官処分をしたことに抗議して法学部教授団や学生らが学問の自由と大学の自治擁護を主張して起こした抵抗運動である。滝川氏はこの事件で大学を追われるが、大戦後、復帰し、のちに総長（1953～57年）を務めている。



以下、大学のホームページから、その沿革や組織、施設の概要などをみていこう。

京都帝大は設立当初、理工科大学として設置されたが、創立2年後には法科、医科が、そ

の後も文科などが併設され、1919（大正8）年には、学部制に変わり、法、医、工、文、理の5学部となり、同時に経済学部も設置されている。

戦後、付属医専と第三高等学校を吸収して新生京都大学が発足する（1949年）。その年、湯川秀樹理学部教授が日本人として初のノーベル賞（物理学賞）を受賞した。その後も、京大は湯川の同期、同僚だった朝永振一郎氏が1965年に物理学賞を受賞するなど化学賞、生理学・医学賞を含め計11名の受賞者を生んでいる。ほかにも数学分野の世界的な賞であるフィールズ賞やガウス賞、医学分野でのラスカー賞など世界に冠たる賞の受賞者を多数輩出している。

現在、法学部、経済学部、理学部、医学部など10の学部と、それぞれ大学院の研究科など18を有し、13の付属研究所、14の教育研究施設、62の海外交流拠点を設置するなど膨大な組織を誇り、これらの組織は国内の大学では有数と言われる。教職員数は5,500名（うち外国人職員450名）、学生数は22,600名、留学生は世界百十数か国から2700名が学んでいる。海外から多くの研究者、留学生を受け入れて国際交流を進めるとともに、国際的、学際的な共同研究を通じて社会や世界に広く開かれた大学を目指している。

現在の総長は26代の山際寿一氏である。理学部を卒業後、理学部研究科教授を務め、2014年10月から総長となった。1952年生まれで同大学の総長としては、初の戦後生まれである。人類学者、霊長類学者として著名であり、ゴリラ研究の第一人者である。

山際総長は、就任後、「大学を、世界や社会に通じた窓を開け、風通しをよくし、野性的で賢い学生を育てることが共通の夢であり目標である」として「WINDOW」構想を打ち出した。その頭文字から、「W」なら **Wild and Wise**（未知の世界に挑戦できる実践の場として、野性的で賢い学生を育成する）、「I」なら **International and Innovative**（研究の国際化を一層推進し、イノベーションの創出を図る）といったように、今後、京大が歩むべき指針を示したものだ。総長は、この構想の中で、「みな同じ目標に向かって能力を高めただけではイノベーションには結びつかない。単に競争的な環境をつくるのではなく、分野を超えて異なる能力や発想に出会い、対話を楽しみ協力関係を形作る場を提供していきたい。そうした出会いや話し合いの場を通じて野性的で賢い学生を育て、背中をそっと押して彼らが活躍できる世界に開いた窓から送り出すことが我々京都大学の教職員の共通の夢であり、目標でありたい」との抱負を述べている。

ちなみに「N」は **Natural and Noble**（自然に親しみ、学び、高い品格と高潔な態度を身に付けられる学びの場をつくる）「D」は **Diverse and Dynamic**（多様な文化や考え方を受け入れ、悠久の歴史の中に自分を正しく位置付ける落ち着いた学園の場を提供する）「O」

は **Original and Optimistic**（失敗や批判を恐れず、それを糧にして異なる考えを取り入れて目標達成に導くような能力を涵養する）最後の「W」は **Women and The World**（男女共同参画推進アクション・プランや学生のキャリアパス構築支援により明るい希望を持てる環境を整備する）である。



京大は 2 年後には、創立 125 周年を迎えるが、2 年後に向けて、「国際競争力の強化」、「研究力の強化」、「社会連携の推進」という 3 事業を展開するなど、記念事業と取り組んでいる。

「国際競争力の強化」としては、これまで広く海外に門戸を開き、多様な文化や考え方を受け入れ、自由に学べる精神的風土を培ってきたが、こうした風土を継承しながら、人々を導くことができ、したたかで強靱な次世代のグローバルリーダーを育成することを目指す。具体的には、最優秀層の外国人留学生を入学させるとともに、国際感覚あふれる学生を育成するため意欲的に海外へ送る出す事業も進めていく。

「研究力の強化」では、豊かな環境の下で、新しく独創的な発想、“おもしろい”ことに取り組み、多くの世界的な賞の受賞者を輩出し、西田哲学や霊長類学など新しい学問を生み出



してきており、今後も、この伝統の下で若手の育成に努める。

「社会連携の推進」では、大学の全額出資子会社である京大オリジナルを中心とした新たな産官学連携「京大モデル」を構築、活用するとともにベンチャー企業へのインターンシップや企業からの講師招聘を含めたアントレプレナー（起業家）教育、世界最高水準の研究成果を新産業創生や社会的価値創出に結びつける京大ベンチャー支援などを行うとしている。

他大学でも近年、同様の傾向があるが、従来の学問領域・分野を乗り越えた学際的な学部を創設する動きが活発だ。京都大学で言えば、総合人間学部がそれであろう。1992（平成4）年の設置で、これまで人文科学、社会科学、自然科学に分かれていた学問分野を乗り越え、横断する「人間の学」の創出を目指してつくられた。絶え間なく変化する現代社会における人間と文明と自然の新たな結びつきを見い出す、としており、入学者選抜においては、一般入試で文系と理系の二つの募集区分を設け、多様な基礎的学力を図っている。いわば文系と理系両方の総合的な思考力、表現力を評価して選抜している。入学後は、人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系という五つの学系を選択して学んでいく。

同様に、学際的なアプローチで注目されるのが、「こころの未来研究センター」であろう。心理学、認知科学、認知神経科学、公共政策、美学・芸術学、仏教学など「こころ」にかかわる多彩な専門分野の研究者が集い、研究、教育、実践に取り組むことを目指して2007年に創立された。日本や世界が直面している多くの課題に、人間の「こころ」という点に着目して取り組み、解決の糸口を見つけていこうという狙いがあり、注視したい。

最近、脚光を浴びているのが、ノーベル生理学・医学賞を2012年に受賞した山中伸弥氏が率いるiPS細胞研究所であろう。山中氏らの研究グループは、皮膚細胞の遺伝子を操作して成長の過程を逆戻りさせ、受精卵のような状態に戻す「初期化」の手法を開発し、2007年にはヒトで万能細胞「人工多機能性幹細胞（iPS細胞）」の作製に成功した。これを受けて京大では08年に「iPS研究センター」を設立、これを発展させて10年3月に研究所を開設したものだ。同研究所では、2030年までの目標として（1）iPS細胞ストックを柱とした再生医療の普及（2）iPS細胞による個別化医薬の実現と難病の創薬（3）iPS細胞を利用した新たな生命科学と医療の開拓（4）日本最高レベルの研究支援体制と研究環境の整備——を掲げて研究に取り組んでいる。

日文：滝川 進

写真・翻訳編集：JST 客観日本編集部